共生社会を考える市民の集い　開催

だれもが生きやすい社会とは

2014 年 2 月 9 日（日）、に教育総研フォーラムＩＮかごしま「共生社会を考える市民の集い」（共生を考える市民の集い実行委員会主催）を開催しました。

会場のホテルウェルビューかごしまには、会場いっぱいの 374 人の参加者があり、充実した内容の議論が行われました。嶺井正也 教育総研所長が冒頭あいさつを行い、「急激に変わる教育政策の中で、今こそ教職員と保護者、地域が繋がることが大切だ」などと述べました。

第 1 部では、川内ひろしさん(教育総研都市政策研究会研究員)と桜井智恵子さん(大阪大谷大学教授)が「競争・格差者会から共生社会へ」というテーマで対談をしました。熱意あふれる川内さんと穏やかでゆったりした桜井さんの対照的なトークの中で、社会や学校が競争社会に追い込まれ、きつい思いをしている状況の中で「存在承認」（存在そのものを認めること）が重要であること、その「存在承認」をしていく「空気」をみんなでつくっていくことが大切なことが語られました。幕間では、麦の芽福祉会の障害者の皆さんによる元気なジャンベ演奏が、会場を包み込みました。

第 2 部では、嶺井さんがコーディネーターを務め、「地域における子ども・子育てと生きやすい市民社会」をテーマにシンポジウムを行いました。パネラーは、有川文人さん(NPO 法人くりのみ福祉会理事長、NPO 法人 寿学童保育の会理事長)、力石久美さん(子ども芸術センター代表理事)、中村隆司さん(麦の芽福祉会法人本部長)の 3 人で、それぞれの立場で「子ども・子育て」について活動や課題など意見を述べました。3 人に共通していたのは、「地域において、生きにくい状況になっている」ということでした。その中で子どもや保護者をどうやって支えていくのかということが話題となりました。フロアからもたくさんの意見や質問が出て、時間が足りなくなりました。フロアから「だれもが生きやすい社会には、周囲の無理解という大きな壁がある」という意見があり、みんなで考える大切な時間になりました。

【アンケートより】

○　「存在承認」、そのままでいいことを認めることをしていかなければならないと思った。学力、コミュニケーション能力で子どもたちをはかり、比べている自分自身を省みることだった。明日からその子のままでいいということを頭の中において接していきたい。

○　立場の違うシンポジストの実践を聞いて、更に参加者からの質問、意見など多様な価値観を見聞きしてよかった。障害をもつ方が入所されている福祉法人の権利の話、空気の話が非常に勉強になった。改めて共生社会の必要性を感じたが、一歩でも進めるべきだと思った。

○　スウェーデンの福祉の意味は「悲しみのわかちあい」。私は日本では「しんどさのわかちかい」にすべきだと常に思っています。

○　ついつい競争原理に流されがちな一人ひとりや社会のあり方に気づかされた。